

閑話三題

山口正義

一、米津家大名墓所

『多摩のあゆみ』第一六〇号（平成27年11月）は多摩地域の文化財の特集でした。その中で東久留米市の文化財の項には「多摩地域唯一の大名墓所」が紹介されていました。

それは東久留米市幸町の米津寺（むつしんじ）にある、江戸時代の「米津家墓所」（都指定史跡）です。

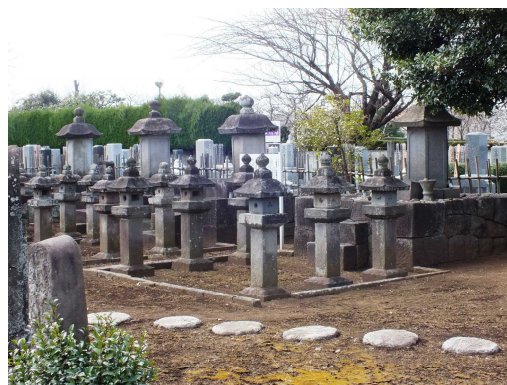
「米津」というのは、古文書の勉強の中で「米津伊勢守領分 武州多摩郡乙津村」というような形で何回か出てきています。それに会員の方が以前「米津梅干之助」について調べられた記憶もあります（十章参照）。

という訳で、この大名墓所を見学しようと米津寺に出掛けてみました。

米津寺は明治二十二年に本堂・庫裏を焼失していて、現在見る本堂は鉄筋コンクリート製で味気なく感じます。焼失を免れた楼門は再興のために国分寺に売却され、現在同寺の楼門になっているといえます。写真で見ると重厚な建物です。本堂西南に墓地があり、その奥の方一帯が米津家の墓所でした。大名墓地として広いのか狭いのかわかりませんがそれなりの広さです。四つの大きな特徴的な墓とその前には石灯籠が何基もあります。墓所にある案内板には概略次のようにありました。

久喜藩主・長瀬藩主米津家墓所

米津寺は万治二年（一六五九）米津田盛を開基とする米津家の菩提寺。墓域に二代田盛・四代政矩・六代政崇・八代政容の墓標と供養塔や石灯籠などが並んでいる。墓標の形状は笠付六角塔身型で統一。塔身には『碧巖録』からの引用がある。米津家は徳川譜代の家臣で初代田政は江戸町奉行を勤め武蔵・下総・上総に五千石の領地を与えられ、二代田盛の時代に一万五千石の大名となる。三代政武は久喜藩主に、七代通政は出羽長瀬藩主に。門前村・神山村・前沢村（東久留米市）、乙津村・上代継村・下代継村（あきる野市）などが米津領であった。



米津家墓所（2016年2月）

何故偶数代のみ墓なのかよくわかりません。因みに奇数代の墓は深川の本誓寺にあったということですが、現存しないといえます。

二、高橋下総とは誰か

慶応四年の五日市村の御用留を勉強したのはもう四年も前のことです。慶応三年から四年に掛けては薩邸焼き討ち、赤報隊（のち嚮導隊）の活動、戊辰戦争勃発と目まぐるしい。興味が尽きず調べ出すと深入りしやすく、本来の勉強を忘れがちになります。慶応四年正月の文章を習いました。次のようなものです。

む蔵相模其外

関東筋諸国 官軍

檄文

執事



相楽総三墓（諏訪・魁塚）2016年8月

徳川慶喜事反逆兵ヲ 朝廷江向ケ発炮致
候段古来未曾有之朝敵たるを以テ官位並
領所等不残御召上ケニ相成猶御追討として
東海東山北陸之三道御討入ニ相成東征
大將軍御下向被遊候間諸藩者勿論草莽
有志之者早々勤王之義旗を掲ケ速ニ
反逆之徒を討平ケ上江 宸襟越安
し奉り下者萬民救ひ王政御復古之道
相立平生尊穰之志越達寿る之機会此
時を不可失様 御沙汰ニ候事檄之至ル
處謹而聞之

官軍先鋒

慶應四辰年正月

郷導隊

高橋下総

閑話三題

正に檄文です。この時期、「官軍先鋒郷（嚮）導隊」はまだ「官軍赤報隊一番隊」だったのだろうか、ということとは脇に置いて、この「高橋下総」とは誰か。

このことが気になり、以来思い出しているが皆目わかりません。赤報隊の人名録には調べても出て来ないので。この檄文は相当広く出まわっている筈だから誰か調べたに違いないと思いつつもわかりません。

最近、『相楽総三・赤報隊史料集』（西澤朱美編）という本が調布市立図書館にあるというのがわかりましたので同図書館まで行ってみました。そこで見たのはほぼ同じ文章の中で「高橋下総」にある次のような（注）でした。

赤報隊の人名録に高橋下総なる隊士は認められないが、国立公文書館蔵「赤報記」表紙裏に

「薩邸飛脚 井上平右衛門

乗船周旋

下総豊田郡沼野森村

鷲之神社神主 高橋上総之介事

薩邸之時ハ佐々木氏ヲ称ス 新太郎」

の記載があることから、あるいは高橋上総之介（高橋新太郎）が下総と同一人物かと思われる。

正直分かったような分からないような文章ではありません。やっと出会った資料にも確定的なことはわかりません。ひょっとしたら、わざと分からないような名前にしたのではないか、との疑問も湧き起ります。調べることの難しさを痛感しました。

閑話三題

三、訓練橋と常夜燈

「農兵」のことは今まで勉強した中で何回も出てきています。印象深いのは武州一揆（慶応二年）の際、五日市で幕側の農兵が一揆勢を鎮圧したくんだり。豪農層の治安維持に当たったということか。他にも薩邸浪士に絡む壺伊勢屋事件（慶応三年）などにも「農兵」が頻繁に出てきたことを思い出します。

さて、散歩がてらに時々行く場所に瑞穂町の狭山池公園があります。片道三十分です。この公園の池に入り込む小川に一つの橋が架かっています、「訓練橋」とあります。傍らの標識には、「慶応元年から二年にかけて、この辺りの芝原で農兵に鉄砲等の訓練を行ったために名づけられた。参加者は近隣周辺の村々の役人層の子弟が大部分で総勢七十九人。この訓練は武士階級の崩壊や徴兵制につながる我が国近代化への第一歩を示すものとして意義深い」（要約）とあります。

農兵制が幕府に採用されたのは文久三年といわれます。『瑞穂町史』には、「元治二年（慶応元年）三月二日砂川村ニテ訓練ヲ始ム 七月十七日真福寺大門ニテ砲術訓練ヲ初ム 八月十九日箱根ヶ崎池地ニテ砲術訓練ヲ始ム 慶応二年十月廿一日砲術訓練始」とあり、農兵制が採用された翌々年にこの地で実際の訓練が行われたことがわかります。また同町史には江川太郎左衛門配下の武士が指導に來ていることも記されています。

そして、この公園には慶応元年に建てられた大きな常夜燈もあります。これも標識には「この頃は狭山池周辺で農兵の訓練があり百姓一揆が押し寄せるなど不安の多い時代だった。また幕末のあわただしさを反映して人馬の通行も多く、燈明をともし、通行人の道しるべ、天下泰平、村内安全を祈った」（要約）とあります。総高五メートルもあり、見るからに立派なものです。

燈明はどの位の明るさだったのだろうかと思いつながら、往時を偲ぶに充分なものと思えました。



常夜燈（2016年8月）



訓練橋（2016年8月）

（「古文書はむら」第9号、平成28年9月）